



水稲の高温障害対策を始めましょう！

本田初～中期の水管理

田植え直後から生育中期（最高分けつ期ころまで）の水管理は、収量や品質に大きく影響します。**今年も猛暑が予想されています！**管理を上手に行い、夏季の高温で発生する**乳白米などの発生を少なくし、高品質な米の生産をめざしましょう。**

1. 田植え後は浅水管理！

・田植え後は水深2～3cmの浅水として水温を高め、活着と生育の促進を図ります。低温の時は5～6cmの深水とし、保温に努めます。

速やかに活着し生育が促進されると分けつが増加して穂数が多くなり、多収となります。

2. 除草剤の効果を高める止水管理！

・薬剤処理後7日間は落水せず、止水管理とします。水位が下がり田面が露出した時は、静かに入水し補充します。除草効果を確実にするために、中干しの開始までは湛水状態とします。

除草剤の有効成分は、水田土壌の表面に吸着されて処理層を作ります。特に処理後7日間が重要で、早期の落水は成分の流出や、処理層の形成を不十分にしてしまいます。処理層が壊れないように湛水状態を保ち、水田には入らないようにします。除草剤の効果を高めるポイントについては、「[営農 News 3126号\(3月29日発行\)](#)」を参照してください。

3. 中干しは高温障害（乳白米などの多発）対策の大事な一つです！

- ・田植え後40日ころから落水し、中干しを開始します※。期間は5～10日間とし、田面にひび割れができる程度行います。湿田や有機物が多い水田では強めに、水もちの悪い水田は軽く行います。
- ・中干しは、遅くても幼穂形成期（出穂前30日ころ）には終了します。
- ・中干しが終わったら、入水と自然落水を組み合わせた間断かんがいを行います。
※中干しは、分けつの数が必要な穂数と同じになったら（コシヒカリでは株あたり20～25本程度）始めることができます。生育が早い場合は、田植え後30日ころから可能です。



中干しは、梅雨時期にあたるので排水が容易に進まないことがあります。水尻（排水口）を低くしたり、暗渠の水甲を開けたりし、できるだけ落水するように努めます。雨が多い年や乾きにくい水田では、10日以上行うこともあります。

中干しの目的の一つは過剰分けつの抑制です。分けつが多すぎると穂数（モミ数）が必要以上に増加し、モミのでん粉蓄積が悪くなり、乳白米などが多くなります。中干しにより、穂数・モミ数を適切にし（コシヒカリで株あたり20～25本程度が目標）乳白米などの発生を抑えましょう。

中干しのもう一つの目的は、土中に空気を入れて根を健全にすることです。根の活力を維持し、生育後半まで養分・水分を十分吸収することにより生育を良好にし、乳白米などの発生を抑えましょう。

さらに、中干しにより土が固まります。そのことにより、収穫前に早くから落水する必要がなくなり、モミが後半まで充実するので、収量・品質の向上が期待できます。

◎高温障害対策全般は、「[営農 News 3106号\(1月9日発行\)](#)」を参考にしてください。

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 News は JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。